

空蟬

挿絵：猫丸

原作：ナオト。

サークル NAO WORKS

ヤブヌマ

他人棒に啼かされる君が愛しくて

2

試し読み版

リアルドリーム文庫

| | | |
|-----|-------------------------------|-----|
| 第一章 | 愛しくて（十一月十六日～三十日）…………… | 4 |
| 第二章 | 忘れたいののに（十一月十六日～三十日）…………… | 51 |
| 第三章 | 侵食されゆく蜜肌（十二月一日～三日）…………… | 113 |
| 第四章 | 偽りの日々（十二月一日～二十一日）…………… | 187 |
| 第五章 | 肉は馴染み、心は堕ちゆく（十二月六日～二十一日）…………… | 213 |
| 第六章 | 愛の行く先（十二月二十一日～二十三日）…………… | 275 |
| | エピローグ（二月二日）…………… | 324 |

登場人物

Characters

浅岡 智

(あさおか とも)

三十代前半の会社員。妻・咲美とは結婚してから五年が経つ。藪沼と出会ったことで寝取られ性癖に火がつき、最愛の妻を醜い肥満中年に抱かせたことから歯車が狂いだす。

浅岡 咲美

(あさおか さくみ)

智の妻で一児の母。明るく健康的で素朴な愛らしさがあり、気は強いが心根は優しく、清廉で快活な性格。夫の愛を確かめるために、夫の望む藪沼との性交に応じる。

藪沼 幹夫

(やぶぬま みきお)

咲美のパート先の副店長。推定年齢五十代後半、不格好な外見で、上の者には媚びへつらい、目下には偉ぶる性格から、咲美に嫌われている。精力絶倫で、性技に長けている。



第二章 忘れたいのに（十一月十六日～三十日）

1

十一月十六日、火曜日。

今日も、馴れ馴れしい声の誘いを断るために疲弊する時間がやってくる。その虚しさに、浅岡咲美は通話相手には聞こえぬよう、溜息を吐いた。

「浅岡ちゃんは嘘つかない人だと思っただけだなあ」

「約束を破ったことは謝ります。でも、もう夫を裏切ることではできません」

平日の昼日中、毎度夫のいない時間を見計らって電話をかけてくる元上司を極力刺激しないよう努めるも、さすがに連続で十日目ともなると感情を隠すことに難儀し始める。

「でもさ、僕と浅岡ちゃんだって、もう他人じゃないんだよ」

通話相手である男、藪沼幹夫の声の馴れ馴れしさが一段と、それこそ怖気を催さずにはおれぬほど強まった。

それに比例するように、聞き手側の苛立ちは、いよいよ爆発寸前にまで高まる。毎度のことながら、息を呑み、声を失わずにはいられなかった。

「何時間も肌重ね合って、汗だくになって、上になって下になって絡み合ったんだ。今さら夫を裏切れないだの、水臭い話じゃない。ね？　そう思わないかい？」

黙っている、いいように言われるだけだ。何か声にしなくては。弁明をすれば否定されることは経験してわかっている、では何を話せばよいか。思考が巡る間に、藪沼の破廉恥発言はどんどんエスカレートしていく。

語られるのは当然のごとく、先月の温泉旅行での「事実」ばかり。事実であるがゆえに反論できないのかもしれないと思うと、情けなさと共に、自身への憤懣がこみ上げてくる。

一度きり、あくまで夫婦間の愛を確かめるためと割り切って臨んだ、藪沼との一夜。固定電話から響く声がその話題に及ぶたび、忌み嫌っていた男の手と舌、性器に翻弄されるがまま喘いでしたという覆せぬ現実と直面させられる。

忘我の中で迂闊にも再会の約束までしてしまったのだ。温泉から帰った翌日すぐに断りの電話を入れたが、藪沼は承服しなかった。それどころか、こうしてしつこく電話してくるようになってしまっている。

（あの夜。藪沼に抱かれる前に智と約束した通りに、私が自分を保てていたら）

こんなことにはならなかった。そう悔いてみても、遅い。

「ね、だから水曜にさ、もう一度会って話を……」

「とっ、とにかく……もう電話してこないでください！」

結局焦りと苛立ちにまみれて今日も強引に通話を打ち切る格好となる。後に残るのは徒労感だけ。夫は仕事、娘は幼稚園。一人残された自宅でうなだれることしかできない。己の無力を痛感する日々にも、限界を感じ始めていた。

明日も藪沼は電話をかけてくる。何か手立てを考えねば、状況は変わらない。

「智……」

ぽつりとつぶやいて、夫の顔が、自然と脳裏に浮かんだ。夫に相談するという選択は、ずっと頭の中に居座っている。

だがそれを思うたびにどうしても、藪沼に抱かれて帰った妻を見つめる、旅館での彼の哀しそうな顔が思い浮かんでしまう。智のあんな顔を見たのは初めてだった。まるで迷子になった子供のようにだった。

智の性癖ゆえに臨むこととなった一夜でもあったのだが、その顔を見た瞬間、彼らの確かな愛情を再確認できた。彼を誰よりも愛している自分の気持ちもだ。

そして自分の罪の深さを、浅はかさを呪い、涙が枯れるほど泣いた。

（私が愛してるのは智だけ。なのに……）

愛する夫と一つになるのと何ら変わりなく、否、ひょっとしてそれ以上に自分を見失って昂揚してしまった。恥の極みたる事実が、目を追うごとに重たくのしかかる。

自分が身体と心を解放していい男性は、世界中でただ一人。夫である智、ただ一人でなければならない。

そんな当然の不文律を愚かにも、藪沼との行為の途中から思い出せなくなっていた。情事を終えた部屋のすぐ外で、待っていた智の顔を見るまで忘れてしまっていた。

帰ってから、夫婦間で温泉旅行の夜のことが話題になったことは一度もない。

（智は、私が藪沼の腕の中でどんな顔をしてたか、どんなに浅ましい声で啼いてしまっていたか……知らない）

知ってほしくない、知らないままで済むのなら、それが一番だ。そんな思いが日増しに、自身の痴態が藪沼との通話により思い起こさせられるたびに強まっていく。

夫に相談すれば、藪沼との情事の内実も知らせぬわけにはいなくなる。また夫の哀しむ顔を見ることになる。それだけは、嫌だ。

「私は……」

どうしたらいいのだろう。

どうしたいかと問われれば即答できるのに、ほんのわずか質問が変わるだけで、わからなくなる。

娘を幼稚園へ迎えに行く前のちよつとした時間、人気のない公園でぽつんと座っていると涙が止まらなくなる。それを同じマンションのママ友に目撃されてもいた。

（……もう、あそこで泣くこともできない）

逃げ道がどんどんなくなる、そんな恐怖にも苛まれる。なのに、夫や娘の前では自然と「いつも通り」を演じてしまう。その理由もわからぬまま。

ただ、日数だけが過ぎていく。

その日の夜。夕食後の寝室で、会議のことで頭を悩ませている夫と少し話をした。

「うん、まあ……何とかなるよ」

湯上がりのパジャマ姿で調子を問うと、聞き慣れた言葉が返ってくる。大学時代、出会った頃からの口癖が聞けたことで、一時的にあの頃に戻れた気がした。

「出た。得意の何とかなる」

当時さながらの調子で茶化すと、気が抜けたように智も笑う。その笑顔に勇気をもたせて、腰かけたドレッサーの鏡と向き合う。確かめた自身の表情は、確かに和らいでいる。

——藪沼は電話で誘いをかけてくるのみなものだから、私が我慢すれば済む話。

スーパールのパートタイマーの職も辞した今、藪沼が押しかけて来でもない限り、顔を合わせる機会もない。今のところ藪沼にそこまでの強行に出そうな気配もない。

刺激しないよう努めて断り続けてさえいれば、そのうち諦めて電話もかけてこなくなるかも、との期待が胸に湧く。

（そしたら全部、元通り……元通りに、なれるよね？）

背後にいる智の顔を見たくなくて、鏡を覗く。すると、すでにこちらを見つめていた彼と、鏡越しに目が合った。

「また見てる」

夫には、化粧水を塗る妻の背を見つめる、変わった癖がある。指摘すると結婚した頃の頃などはバツが悪そうに目を逸らしたりしたものだが、今となつては臆面なく見つめてくるのが常だ。

「ふふ、変なの」

口ではそう言ったが、もう慣れてしまった。そもそもこの癖を知った当初から驚きこそすれ、嫌な気はしなかった。むしろいつも通りの彼の行動に安堵できたとし、愛情の証と思えばこそ嬉しさを覚えるもする。

（大学時代からずっと智と一緒だった。二人で毎日を歩んできて、娘が、智美が生まれてきてくれて……そうして一層大事になった毎日が平和に過ぎていく）

付き合い始め。結婚した頃の頃。さらには以後の連れ添い歩んだ日々を順次回顧することですでに温かな想いに、背を押された気がした。

（智をもうこれ以上裏切りたくない）

だから、藪沼の電話の件は秘匿する。卑怯だと知りつつも、心に決めた。

夫への変わらぬ恋慕を改めて意識したために、パジャマの内側、湯上がり肌の余計に熱を孕んでしまっている。

（火照ってる、って思われちゃってるかな……?）

背に刺さる夫の視線が、いつも以上に熱っぽく感じられる。それが気のせいではな

ればいいと密かに期待して、彼の表情を再度鏡越しに確かめようとした矢先。

「咲美……っ」

「えっ……」

突如名を呼ばれて振り返ると、もう目前に智の唇が迫っていた。

「んっ、んんうっ……も、もうっ、どしたのっ。んっ……!」

予想以上の夫の行動に目を丸くしつつも、内心の喜びを隠すことなく目で伝える。彼の唇は少し乾いていたけれど、それもじきに互いの唾液のぬめりにほぐれていった。結局問いを返したのは、ファーストタッチに心行くまで溺れてから。

いつもより荒々しいキスを終えたばかりの彼は、肩で息しながら、言葉で答える代わりに抱き締めてくれた。そのままお姫様抱っこされて、すぐ先のベッドへと運ばれるさなか。

（あ……!）

不意に、ある情景が甦った。

遠い、薄曇りの日の、情景――。

五年前の春まだ浅いあれば。三月の終わり。智と二人きりでドライブに出かけ、海岸脇に停めた車から、海を見た。

『結婚しよう』

運転席の、青いシャツを着た二十七歳の青年が、海を見たままそう告げた。

（私は驚いて、すぐに返事を返せなかった、嬉しくて、でもそれがすぐには言葉にならなくて）

すると彼——智は、改めて助手席を向いた。その真剣な瞳に魅入られるように。
（気づいたら頷いてた。嬉し涙がこぼれて）

それを見た智が安堵したようにシートに背を沈め、それから取り出したハンカチで涙を拭いてくれた。子供みたいな笑顔になった彼と向き合って「これからもよろしくお願いします」——かしこまった台詞を二人ぴたり同時に紡いで、また笑い合い。

そうして夫婦になった。あの日に聞いた、防波堤にぶつかる波音が耳に甦る。

（今日から私は、智だけの奥さん）

そう思つて嬉し涙を流したあの日の気持ちに立ち返る。

（……もう一度、あの海へ行きたい）

ベッドに沈む背にシーツの感触を覚えながら、思い立ったが最後。溢れる感情に歯止めが利かなくなつた。

「咲……美？」

ぽろぽろ、ぽろぽろ、本当に溢れるように頬を伝うそれを見て、目前に迫つていた智の動きが止まる。まるで自分の方が痛い思いをしているかのように悲しい顔になつて、彼の口が「ごめん」と謝ろうとする。

（違うの、悪いのは、私……！）

一挙に溢れた感情を処理しきれず、それでもやつと「ごめん」の一言を絞り出す。涙声のそれを受けて、彼の顔もまた泣きだしそうになる。それを見ているのが辛くて、まだ伝えきれない思いの丈も込めるつもりで、彼の頭を胸に抱く。

（智。智……！）

もつと熱を感じて、匂いを吸って。内も外も私でいっぱいになって。

雪崩を打つ恋慕の情に衝き動かされ、夫の身体にしがみつくと。押し当てる柔乳の谷間をこじ開けるように迫り出してきた智の顔を捕らえ、またキスをした。耳、首筋、鎖骨。唇の届く範囲すべてに熱情を刻んでゆく。

「愛してる……」

口唇が解放されたわずかな間を縫って、夫が告げた。五年前の海岸でのプロポーズさながらの真剣なその瞳に魅入られる。

きつく抱き返してきた彼の身体のある部分が一層の熱を孕むのを、しがみつくと腹部で感じた。

「私もっ……愛、してるっ……」

美辞麗句を並べ立てるよりも結局こう伝えるのが一番な気がして、事実、より熱を増した夫の求めに応じるがまま、身をベッドに沈める。

恋慕を囁き合いながら舌を、胸を、腰を突き合わせ、互いに相手の温みに埋もれるようにして眠りにつく。

これ以上の幸せはないと、確信していた。

翌、水曜日。藪沼が会いたいと言っていた日であることは覚えていたが、結局応じることではなく、それについての不平不満を伝える藪沼からの電話がかかってくることもなかった。

きつと、このまま事は収まってくれる——そんな安堵が広がり、さらにそれを後押しするように家族でドライブに出かけることも決定した。

（私がドライブに行きたいって言ったら、少し考えた後に、妙に照れ臭そうにした）あの海岸へ行きたがっているということに、夫はきつと気づいてくれている。

期待に胸膨らませて、この日もまた夫の腕の中で眠った。

2

十一月二十一日、日曜。ドライブ当日。空は五年前のあの日と同じ薄曇りで、出立前から咲美の心は沸いていた。

海岸通りを走るさなか、車窓の外に目を向ける。通り過ぎる裸の街路樹が寒そうだ。智もまた同じ景色に目を向けているのに気づき、心が弾んだ。

「なんか、懐かしいな」

後部座席でチャイルドシートに座る娘との会話を楽しみつつ、ハンドルを切った夫が言う。

「うん？」

もっと思いついて出してほしくて、娘の隣からあえてとぼけた声を出した。

「ほら、この道」

指差しながら、「何か企んでるんじゃないの」と目で問うてくる。

「ね。そろそろお昼、食べない？」

そう話を振ると、確信したようで、「ちゃんと場所も決めてる」と破顔する。

「あの店、まだあるかな」

探りを入れるようにとぼけ返す智。それがまた大学時代の空気感を想起させた。

『昨日、ネットでこっそり調べてたじゃん』

そう告げたい気持ちを、夫との対話をまだまだ楽しみたいという想いが凌駕した。

「前は。何食べたっけ」

「それは覚えてないけど。ほら、あの海沿いのレストラン。ちょっと西海岸風の」
うきうきした調子で問答する両親を、不思議そうに一人娘が見つめている。

（プロポーズの前に寄ったから、それどころじゃなかったのかな）

何を食べたか思い出せないという夫の、五年前のそわついた様子を思い出して、心がときめく。

隣席ではしゃぐ娘をいさめつつ、心はすっかり五年前のあの日に戻っていた。

五年ぶりに訪れたレストランは、外観も内装もかつてのまま。ただ、店内のくすみ
が時の流れを感じさせた。

「智美、オムライスがいいの？ お子様ランチもあるよ。ほら、お船も付いてるぞ」
「オムライチュ！」

席に案内されるや、智は智美と一緒にになってメニューを見る。入店前からオムライ
スと言つて譲らなかつた娘にあえて問うことで、反応を楽しんでいるようだ。

「よし。じゃあ、パパは……うーん、ジャンボハンバーグにしようかな」

ひとしきり悩んだ後に、結局五年前と同じメニューを選ぶ。選ぶ際の口振りまで当
時とほぼ同じで、思わず吹き出しそうになった。

「どうした!!」

「え……?」

ただ笑うのを我慢しただけのはずが、夫から真剣に心配する声をかけられる。まず
驚き、それからやっと自分の瞳が涙を湛えていることに気づく。決壊寸前で赤く充血
するそれを見て取ったからこそ、夫は案じたのだ。

ドライブ中もずっと懐かしさに浸っていたせいもあるのだろう、どうも涙腺が緩ん
でしまっている。

心が五年前に戻っているせいで、余計に涙顔を見られることを恥ずかしく感じた。
「ママ、うさぎちゃんのお目目」

「う、ううん、何でもない。大丈夫。私、ちよつと御手洗い行つてくるね。カルボナ
ーラ注文しておいて」

娘の指摘に慌てて、早口で告げるや、逃げるように席を立つ。

思い出巡りも兼ねた久々の家族での遠出に、涙は似合わない。

（今日は目一杯、楽しむんだ。五年前の、あの日みたい、ただ大好きな人の隣で）
だから、少しだけ待ってて。

背に刺さる心配げな視線を申し訳なく思うほど、トイレに向かう足は速まった。

ポーチの中の化粧道具とハンカチを手に、トイレの鏡に向かうこと、五分弱。

「……よしっ」

ようやく納得のゆく表情を取り戻せたことで、気分もだいぶ落ち着いた。

これなら夫と娘に心配をかけることもない。

（智美、泣いてないかな。智は……智美の手前、平静を装ってるんだろうな）

早く顔を見せて安心させてやりたい。

これで心置きなく思い出巡りも楽しめる、との期待も高まり、化粧道具を片付ける
手が急いてゆく。あともう少しで片付け終わる、となった時。

ポーチと一緒に持ちこんだ携帯電話が振動し、着信を知らせた。

「……っ！」

反射的に、ディスプレイに表示された電話番号を確かめる。否応なく脳裏に浮かんだ「最悪の相手」からでないことに、まず安堵した。

藪沼でないなら、出てもいい。そんなわけがない、見慣れぬ番号を警戒して然るべきであったのに。藪沼への怯えが強すぎたがために、彼以外からの電話ならとの油断が生まれてしまい。気づけば通話ボタンを押し、電話に出てしまっていた。

「もしもし、咲美さん？」

通話口の向こうから響く声には、聞き覚えがある。

「桂子けいこです。わかる？」

少し骨ばった吊り目の、四十代後半の女の顔が浮かんだ。藪沼の妻、桂子だ。

以前、そうとは知らずに懇意になり、料理の相談や日々の会話を楽しむ仲間もなっていた相手。藪沼とは互いに公認でスワッピングを楽しんでいるとの仰天告白をしてきたのを、昨日のことのように覚えている。なにせ、その告白が藪沼との一夜の発端ともなったのだ。

電話に出たことを後悔した瞬間には、もう指が通話を打ち切るべく動いていた。

「あ、切らないで。ちよつと、聞いてほしいものがあるのよ」

先回りした桂子の言葉にギクリとして、ボタンを押す直前で指が止まる。

「ほら……今かけてるんだけど、聞こえないかな？　今お一人？　……そう、ならもうちよつと近づいて、ボリウムも上げるわね」

言われて耳をそばだてると、確かに電話口から雑音めいた音が漏れ響いている。音が遠くて聞き取りづらいが、人の話し声のように思えた。

（でも、それがなんだっていうの？）

やはり取り合わずに通話を打ち切るべきではないか。待たせている夫と娘に早く元気になった顔を見せたいとの思いもあり、急いだ思考に再度傾く。

何より、大事な思い出を巡る日に、忘れ去りたい記憶の根源である藪沼に関わりたくないとの忌避感があった。

「今ちょうど、うちのリビングのテレビで再生してるんだけどね。……DVD。どうも、夫がこっそり撮ってたみたいなのよお」

DVD。以前桂子に招かれた藪沼宅で見た海外旅行映像に類するものだろうか。（でも、それをわざわざ私に聞かせる？　こっそり撮る？）

前回見せられたハワイでの撮影映像は、映っている桂子が普通に応答していた。明らかに承諾の上で撮られた映像だった。

加えて、先ほど「一人か」と尋ねられたことが今さらながらに気にかかる。

（私が一人じゃないとできない話……ってことなの？）

そう予測をつけるとますます桂子の行動への疑義が深まり、咄嗟に一人じゃないと

嘘をつけなかったことを、何より電話に出てしまったことを後悔した。

藪沼との一夜以降一度も連絡を取ってなかった桂子が、よりにもよって、夫婦の再スタートをしようと思っていた今日という日に電話をかけてくるなんて、神様がいて、その心配なのだとしたら酷薄すぎる。嘆くと同時に、強まる危機感に対応を迫られる。とにかく、こちらの気を惹こうとする口振りに乗せられては駄目だ。口達者な桂子の話に聞き入っては、思う壺。それには、結局通話を打ち切る他ない。

「あ。あの、今急いでるので。もう切りま」

切りますね、と言い終えるよりも先に、桂子言うところの「夫の隠し撮り映像」のボリウムが上がり。

『何が入ってるっ?』

『お、おちんちんっ!』

浅ましい会話をする男女の声が、それこそ携帯電話越しにトイレに漏れ響くのではと心配せねばならぬほどの大音量で、耳をつんざく。

「誰の声か、わかるでしょお」

ニタニタ笑いが透けて見えそうな声で、桂子が言う。そんな厭味ったらしい物言いに反撃できないほど、衝撃と動揺が胸内に広がっていく。

「あ、あ、う、嘘っ……」

咄嗟にそう言うことしかできなかった。あの一夜が隠し撮りされていた、そんなこ

と、あつてはならない。

けれど確かに響き続ける声は、温泉旅行で藪沼に抱かれた、あの夜的一幕だ。

『副店長おつ！ 副店長おおつ！』

散々絶頂を味わわされた後の息も絶え絶えの喉を振り絞り、恥知らずにも藪沼の名を、彼に求められるがまま職場の肩書で呼び連ねる自分。

今気持ちよくしてくれているのは誰、との問いに、『もう許して』と泣き乞いながら応じてしまっている自分。はしたなくも媚を含んだ、己の声色。

認めたくない事実を改めて突きつける音声をこれ以上聞き続けることは、拷問に等しい。冷静さを保てる自信もなかった。

「止めてっ、もう止めてくださいっ」

荒らげた声で再生中止を要請する。

桂子は隠し撮り映像だと言っていた。音声だけでなく、秘匿すべき一夜の光景そのものが今、彼女の目に触れているということか。

撮られていたとは、一体どこから、どこまでだ。

早く通話を打ち切らねばとの危機感と、秘密を知られたことによる羞恥、事の次第を知りたい思い。三つがせめぎ合う。

「と、撮ってたつて、どういことですかっ！」

結局最後の一つが競り勝ち、怒気を孕んだ声となって吐き出された。

藪沼と撮るなど約束を交わしていたわけではなかったが、承諾なしに撮っていた、それ自体が信頼を損なう事態。元より藪沼との間に信頼関係などなかったがルール違反ではないか。

「まあ、あの人の癖みたいなものでね」

「癖って……そんな！」

隠し撮りしていた藪沼を擁護するかのごとき言い様に、怒りが沸点に達した。

「即刻処分して、いえ、私が処分しますから渡してください」

もはやほとんど詰問に近い口調で、対応を要請する。トイレに誰か入ってくるかも、といった注意を払う余裕など、とうになくしてしまっていた。

そんな、必死極まりない様を嘲笑うかのように。

「それがねえ。うちの人、どうしてももう一度あなたと寝たいって、聞かないのよ」
まるで世間話をするような気安さで、告げられる。DVDを渡せと言ったことに對しての返答が、それ。意味に気づいて、戦慄した。

「言ってる意味、わかるわよね？ DVD、あの人のことだから、きつとご主人に」
念を押すように告げる桂子の声が、想像が間違っていないことを証明する。

「脅迫、するつもりですか……？」

問い返す声が震える。携帯電話を握る手には冷や汗が滲んで、今にも取り落としてしまいうさだつた。

「でも、仮にそうだったとして、元々ご主人はそういう性癖をお持ちだし、あなたが必要以上に罪悪感持つことないんじゃないの？ 案外、喜んで映像に見入るかも」

「やめてください!!」

桂子の言葉に釣られて、脳裏に浮かんだ、DVDを見る智の姿。その表情は、あの温泉旅館で見たのと同じ、この上ない悲しみに染め抜かれている。

（智のあの顔を見た瞬間に、二度と裏切らないって決めた。智からの強い愛情を感じて、信じてゆけるって思ったんだから!）

だから、夫を深く知りもしないで適当なことを言わないで。よっぽど、そう吠えてやりたかった。

だが怒りが強すぎるためか、うまく言葉になって出てこない。

その間、論す口振りに変わった桂子の語りが、嫌でも耳に入ってくる。

「ね、咲美さん。あなたは一度は他の男に抱かれたのよ。どんな理由があろうと、その事実が変わらないわ」

「……それは、い、色々あつて。夫が了承した上で……私たちは」

夫婦間の愛情を確かめるため。そのためだけに、したことだ。

桂子の口達者ぶりを認識していても、反論せずにいられない。もしかするとこの時点ですでに口車に乗せられているのでは、との危機感は、次なる質疑応答に意識が向くことで立ち消えた。

「了承してればよくて、してないといけないの？ やつてると同じじゃない？ ……こういう言い方あれだけど、一度も二度も同じじゃないかしら」

理解し難い論調を展開しだした桂子が、得体のしれない存在であるようにも思えてくる。価値観の接点をまったく見出せない、こんな相手にどれだけ言葉を尽くしても、わかり合えることはないのではないか。

不安と恐怖がない交ぜに迫り来て、とうとう膝まで震えだす。洗面台についた左手を支えにしていなければ、確実に膝から崩れ落ちて、トイレの床に尻をつけるはめになっただろう。

「どうしても嫌なら警察行った方がいいと思うわよ」

過去に似たようなことが何度かあった、とも語る桂子の声は冷静だ。自分だけが取り乱しているという状況が、一層の焦りと怯えを生む。

「正直言って、私も警察沙汰は嫌よ。あなたも夫婦関係おかしくなるのは嫌でしょ？」
やっと一つ、気持ちを理解できる話が聞けた。これまでがこれまでだっただけに、暗闇の中で光明を得た気にさせられる。

同時に、智に事の次第を知られることを何より恐れていた自身の気持ちまで思い出させられ。

（助けて……智！）

よっぽど叫びたかった言葉が、喉の奥へと引っこんでしまう。

「あと一回きりと約束するなら、私が咲美さんと話をつけるって、藪沼にはそう言ったの。藪沼は了承したわよ、これつきりにするって。これについては私が責任持つわ」

警察に行けば、事が露見してしまう。桂子の申し出を断つても、それは同じ。智に、藪沼との一夜を見られるのだけは、絶対に嫌だ。

——結局、選択肢がないのと同じだ。

(……あと……一回)

たった一度、我慢すれば。追い詰められた心が、音を上げかけた。

「あと一回だけ我慢するか。それとも警察に行って、ぜんぶ公にするか。あなたの家庭にとつてどちらがいいのか、もう一度ゆっくり考えてみて」

告げる桂子の声は妙に優しく、心の揺らぎに拍車がかかる。

(でも、そんなこと……!)

選ぶよう強いられている選択は、智をまた裏切るということに他ならない。夫婦としてのスタートを切った思い出の地で答申を迫られているという状況が、一層の拒絶を胸の内に孕ませる。

「そうね、心配なら念書でも何でも藪沼に書かせるわ」

翻意を促す桂子の話が続く。

その背後では未だ、卑猥な音声が響いていた。

(また、藪沼の手の内で、あんな声を上げさせられる……?)

想像した先にあるのは恐怖だけだった。

「返事は私にしてくれればいいし、すぐにとは言わないわ」

「あ……っ、待つ」

突如話を切り上げた桂子を引き留める間もなく、通話は打ち切られてしまった。

（なによ……!）

自分の夫の悪行を放っておいて、上段からの物言いに終始し、最後には勝手に話を打ち切った桂子に腹が立つ。そんな彼女に振り回され通しの自分が情けなかった。

『あと一回だけ我慢するか。それとも警察に行って、ぜんぶ公にするか』

桂子の、最後の問いかけが残響する。問われるたび追い詰められていくようで、頭を振って追い出そうとするのに、しつこくいつまでもその問いが繰り返される。

すっかり顔色の悪くなった自分を鏡越しに見つけた時、やっと席で待つ夫と娘のことを思い出した。

「……戻……らなきゃ」

でないといい加減、心配される。否、きつとすでに心配しきりに待っている。

ふらつく足に喝を入れ、逃げるようにトイレを後にして、夫と娘の待つ席を目指す。その間も、胸に渦巻く不安と恐怖は増大する一方だった。

結局、体調を心配する夫の意見を受け入れ、思い出の砂浜を踏むことなく帰宅する

ことになった。

(電話に出たりしなければ……)

きつと楽しい一日を過ごせたに違いない。

問題を先送りにするだけだとしても、かつてプロポーズを受けた砂浜を訪れて、何もかも洗い流してくれるような懐かしい潮風に吹かれたなら、今よりもずっと強い気持ちで事に当たれた気がする。

帰宅後、早く休むよう言われて独り身を横たえた寝室で、薄暗がりの天井を眺めていると、「もしも」が幾つも浮かんでは消える。

「なんかあったら言って」

出来合いの夕食を済ませ、智美を寝かしつけてから顔を見せた夫の気遣いが、余計に心苦しい。

夫は体調のことに関して「何でも」と言っているのだ。わかっていても、今日の桂子との話を相談したくなる。

けれど、夫以外の男に痴態を曝したという事実を知られる恐怖が他のすべてに歯止めをかけ、吐き出すことを許さない。罪悪感に苛まれ眠れぬ夜を過ごすしかかった。

それから一週間余。日々、夫の優しさに触れては内心で懺悔し、愛しく思うがゆえに決断を下せない状況が続いた。

愛用の鞆を小脇に抱えて、両手に燃えるごみの袋を握って出社していく智。

進んでしてくれているゴミ出しの際、近所の人とはち合つて、夫婦仲を褒められ照れる智。

家族のために張り切つて働いて帰ってくる彼の、疲れてはいるけれど嬉しげに綻んだ表情が堪らなく好きで、玄関で出迎えるのも楽しみだった。

一人娘の寝顔を一緒に眺め、その成長ぶりを喜ぶ時間も。休日に行つたショッピングモールや動物園、遊園地——様々な場所での思い出も、智の笑顔と共に甦り、嬉しさが募るその分、目の奥が熱くなった。

（いつだって私と智美の隣を、歩調を合わせて歩いてくれた）

呼びかけると決まつて照れ臭そうに鼻を掻く智の姿が、記憶を手繰るほどに若くなる。一緒に積み重ねた時間の幸せを噛み締めるほど、決意は鈍った。

けれど、待っていても、いずれ藪沼から脅迫を受ける。

（その前に、決めなきや）

焦りによつて急かされている面は多分にあつた。そもそも夫以外の腕の中で我を忘れたことで生じた危機であるという、自責の念の影響も否めない。

（それでも、私がそうすることによつて、今の幸せが守られるのなら）

家族との幸せを壊されたくない。そのための行動を起こせるのは、脅迫という事情を知る自分だけ。迷いも不安も尽きなかったが、答えは一つしかなかった。

迷いと不安を振り切るように桂子に電話をかけたのが、二十九日の昼のこと。
折り返すように藪沼が連絡を寄こし、逸る彼の申し出によって、再度の密会は翌三十日に決まった。

3

十一月三十日、火曜。

いつものようにゴミ出しをしてから出社する夫を見送り、娘の通園の身支度にかか
る。靴下、ブレザー、コートを着せてやり、娘が自らボタンを留めるのを眺めながら。
『今日は神戸の友だちと会うんだよな？』

出社直前に確認してきた夫の前で平静を装っていたか、応答する自身の振る舞いを
思い返す。

（……大丈夫、ちゃんと言えてた。返事を聞いた智はいつも通りだったもの）

だが、何度確認しても不安は失せない。夫に嘘をついて別の男に会う心苦しさは、
家族の幸せのためだという大義名分をいくらかざしても霧散してはくれなかった。

「ママ、みちゅあみは？」

ソファに腰かけたまま、しばしばうつとしていた母の袖を智美が引っ張る。

時計を見るとすでに送迎バスの来る時間が近づいていた。

「ごめん智ちゃん今日はお時間ないから……セーラープリティのリボンにしよ、ね？」
愚図る娘をどうにかなだめてリボンを結び、小さな身体を抱き上げる。送迎バス
来るマンション前へと走る間も、今日、これからのことが頭をよぎった。

幸せな日常が汚されている気がして泣きだしたくなるのを、娘の手前どうにか堪え
る。それで精一杯の自分の弱さが、情けなくて仕方がなかった。

道すがら、何人かのママ友と出くわして他愛のない挨拶を交わす。

——彼女らのように専業主婦をしていれば。生来の活動的な性根が疼いて、パート
タイマーに応募したりしなければ。それが、藪沼と同じ職場でなかったなら。智が、
藪沼に出会わなければ。

（智が変な性癖を芽生えさせることもなかった。きっと違う未来が、あった）
何か一つ、ボタンをかけ違えていたならと思わずにいられない。

結局沈痛な表情は、送迎バスに乗りこんだ愛娘が車中から手を振る姿を見ても、晴
れることがなかった。

4

夫と娘を見送って一時間半後の、午前十時。

三つ隣の町のラブホテルの一室に、咲美の姿はあった。

「結局、車の中じゃ一言も話してくれなかったね」

共に入室した五十男の皮肉が飛ぶ。すでにシャワーを済ませ、ガウン一枚の姿となつてゐる彼の前のめりぶりに対し、咲美の心は冷えきつていた。

先にシャワーを済ませ、纏つたガウンの下はショーツ一枚といういで立ちで男を待つていたこともあり、身も冷えている。

化粧は一切せず、髪もさつと梳かしたただけ、服装だつて日常のまま。地味極まりないカットソーとジーンズ姿でやってきた。どれも、今日の行為に感傷などないとの意思表示に他ならない。

だが、藪沼はそんな姿を見てさえ「むしろそそる」などと言つてのけた。

そんな男とこれから八時間も、ホテルで過ごす。それも、藪沼の指示には逆らわぬとの条件をつけられた中で。桂子を介してあらかじめ取り決めたこととはいえ、気が遠くなる。

しかし、これを持ち切りさえすれば、脅迫材料である隠し撮りDVDを受け取れる。桂子立ち合いのもとで藪沼所有のパソコンに残る関連データも消去される。何より、藪沼に接触を図られることは金輪際なくなるのだ。以上三つの約束事を藪沼が自筆でしたためた念書も、すでに車中で受け取つてゐる。

今回で、本当に最後。今日を耐えれば、憂いがない日々が戻ってくるのだ。

(……智。私、今度こそ、気を確かに持つて乗り切つてみせるからね)

ホテルに入る前、平日の朝だというのに駐車場に多くの車があるのが異様に思え、足が竦み、鼓動が速くなった。

だが今は夫に勇気をもらい、震えはない。きつとやり切れるとの思いがある。覚悟を決めて、ベッドに腰を下ろす。年季の入った薄汚れた天井が目についた。

（不潔……）

一緒にいる相手が藪沼であるという事実が、余計にそう思わせる。

「せっかちなあ」

ぼやきつつもニヤツとしたえびす顔が、ベッドに上がるや、背後に回りこんできた。

「たっぷり楽しもうね」

期待を隠そうともしない男の鼻息に、うなじを荒々しくくすぐられる。鳥肌が立ち、吐き気を催したが、堪えて無言を貫いた。

（反応などしてやるものか）

頑なに誓うも、背を抱くように密着されると、さすがに身が強張る。

智とは違う、脂ぎった匂い。それが、忌まわしい温泉旅行の夜の記憶を呼び戻す。嫌というほど身に染みている藪沼の狡猾な手管の数々が脳裏をよぎり、身震いすると同時に身体の芯が熱を孕んだ。いったんは失せた不安が再び渦を巻く。

「ふふ」

女体の感応を見てほくそ笑んだ男の、かさついた唇が首筋に触れた。チュ、チュ、

と浅く繰り返し触れながら、徐々に下へ、鎖骨の方へと降りてくる。口づけられるたびチクチクと刺さる髭剃り跡の感触が、嫌で堪らない。

(……………智……………！)

胸の内で名を呼んだ愛しい人物の、日々の笑顔を次々に思い出した。

意識をよそに向けることで、肌に這う怖気をやり過ごす――。

思惑は確かに奏功した。ざわついていた心が智への恋慕に浸ることで安らいでゆく。その心地よさに、より意識が傾いだ、まさにその瞬間。

「あつ……………！」

囁んで閉じていた口唇が、堪らず短い喘ぎを發した。慌てて己が身体に目を走らせると、刺激の出所はすぐに知れた。

回想に逃げるあまり隙を増やした女体の腋の下から、男の右手が攻め上がり、ガウン越しの右乳房を掴んでいる。やはり無防備だった左内腿を、上へ下へと藪沼の左手のひらが這い撫でてもいた。

男の手の熱っぽさに怯えるように、肩が震え、脚が自ずと外側に逃げてしまう。

「や、ツツ」

ほんのわずかだが結果的に自ら股を広げてしまったことに、強い羞恥を覚える。幸せな脳内回想を断ち切りざるを得なくなり、早くもすぎる先を失ってしまった。

急ぎ股を閉じた時には、すでに「チクチク」がうなじを通り過ぎ、耳裏に当たって

いる。間髪容れず、耳裏に、舌のヌメリが擦りこまれた。最初はくすぐるようだった
感触が、じきにクチャクチャ、レロレロという粘い響き伴う大胆な動きに変わる。

「……っ、ふ……っ」

女の口端から小さな呻きが漏れたのを受けて、背後の男の鼻息がまた強まった。

「声、無理に堪えないほうがいいと思うよ」

囁きと共に発せられた熱い吐息が、くすぐったさを伴って耳穴の奥へと潜行する。

耳が性感帯であるという秘密も、前回の温泉旅行の夜の折に露見済みなのだ。攻められるのはわかっていた。

（だから、驚いてなんかない。今のはただ反射的に声が漏れただけ。耐える心構えができてれば、こんなもの……）

言い聞かせるように内心で唱え、開きたがる口唇に喝を入れる。動悸を鎮めるために鼻から息を吸いこんでは、ゆっくりと吐く。それらを延々繰り返した。

（今、身体を弄り回してるのは、脅迫までした最低の男。そんな男に触られたって、嫌なだけ……）

努力に反して次第に速くなる自身の息遣いに苛立ちを覚え、それでも頭の熱を冷ますための深呼吸を続ける。

肌寒さを覚えて視線を下げると、すでにガウンが藪沼の手にめくられ、自らの白いショーツが覗いていた。

夫との夜の営みの際には決して選ばない、手持ちの中で一番色気のない、腰骨まで隠れる安物の綿下着。それにすら昂奮しているのか、尻にぐいぐいと押し当てられる藪沼の股間が熱を蓄え、硬くなっていく。

（嫌……ぐりぐり押しつけてこないで！）

ガウン越しにも伝わるその厚みと硬さ、丸み帯びた亀頭の圧力に、女芯が震える。ほどなく、藪沼の右手が撫でていた右乳房から離れた。

ベッドの端に下ろした腰を前に逃がすことができず煩悶しているところに、救いの手が差し伸べられた。思わずそんな気になって、力の抜けた肩を揺らし、熱ごと吐き出すように、今度は口を開けて深呼吸をした。

直後に、背中では男の手がブラのホックを外す音が響く。肩紐をずらされてガウンの中で自由になった乳房の球面を、溜まっていた汗が滴り落ちてゆく。

その丘陵へと施されたのは、智の長く綺麗な指による優しい愛撫とは百八十度違う。分厚く無骨な手が、姿に似合わぬ繊細さで圧と摩擦を与えてくる。だがそれは、藪沼が乳房の感触を楽しみたいがためのもの。女体の感応を楽しみ、そうさせている自分に酔いたいがための、愛撫とも呼べぬ行為だ。

「は……っ、ん、んん……っ」

わかっていながら声を殺せない。胸が発するむずつきを、無視できない。

悔しさを噛み締めて耐える様を嘲笑うように、左右同時に乳首が摘ままれ、指腹で

転がすように弄ばれる。耳裏とうなじには再び、舌。

二点で弾けた小さな、それがゆえに歯痒い刺激に苛立ちが募る。

（どういう、つもりなの……？）

温泉旅行の夜と手口を変えてきた藪沼。その真意を測りかね、動揺を抑えられない。募る歯痒さに屈するように、口唇の端から唾液がひと筋、糸引くように漏れ落ちた。

「ああ、浅岡ちゃん、いい匂いだ」

首筋にくっつけた鼻をクンクンさせながら、藪沼が言う。しつこく接吻の雨を唇の届く範囲に降らせ続ける男への嫌悪は、薄らぐどころか増す一方だ。

（気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い……！）

だが、肌の火照りは鎮まらない。いつの間にか男の手によつてベッドの上へと持ち上げられ、抱える彼の手にされるがまま開脚してしまっている左足の付け根。鼠蹊部よりもさらに先の、味気ないショーツの奥に潜む芯の部分の状態から、目を逸らし続けられるはずもなかった。

「あれっ？ あれ、あれえ〜？」

さも今気づいたという風に、藪沼が素つ頓狂な声を上げる。

（私は、智の奥さん。智美のお母さん……二人との幸せを守るために今、ここにいるのっ！）

言い聞かせるように胸内で繰り返す、女。

「浅岡ちゃん。ほら、もう」

それにとどめを刺さんと、男が、ショーツのクロッチに添わせた指で指し示す。

「下着の上からでも丸わかり。濡れて、熱くなってるよ」

スリりと響く股布越しの摩擦刺激に煩悶する中で聞かされた、信じたくない言葉。けれど目で見て確かめた己の股間の様はそれ以外の何物でもなく。

「ほらほら、見てこれ」

逸らした目をもう一度向けろとしつこく迫る男の要求を拒み、瞼をきつく閉じる。

瞼裏に今朝見たばかりの夫の、いつも通りの背広姿と、愛しい顔が甦った。

（智……私……わた、しっ……っ）

よりきつく閉じた瞼から絞り出されるように涙がこぼれ、頬を伝う。

「可愛いよ、めっちゃ可愛い、浅岡ちゃんっ」

その涙にすら昂奮した藪沼が、辛抱堪らずに抱きすくめてくる。舌のヌメリをうなじに擦りつけて、ショーツ越しに恥丘をやんわり、揉むように押してくる。

「ンウッ……」

押されたから声が吐き出された。それだけのことだ。女が理由をこしらえる間も、藪沼の手指は攻め続けていた。

股布の上を縦に擦るように動くその指先が、じきに熱源——蜜を孕んだ秘裂と、上部に息づくクリトリスとを探り当て、喜ぶ男の鼻息が耳朶をくすぐった。

同時に乳首を優しく転がされ、また短い喘ぎを吐かされる。優しくしたかと思えば強く摘まみ、乳首がじんと疼き悶えているところにまたも優しく、焦らし目的の摩擦を与えてくる。

身体が反応してしまうのは、仕方のないこと。前回、温泉旅行の夜はそれに動転した状態を正せぬうちに、されるがままとなってしまうた。

（でも、今回は……違う）

気持ちをしっかり保てば、耐えきれはるはずだ。決意も新たに我が身を見下ろすと、すでにガウンの紐は解かれ、ショーツ一枚の姿にされている。

（……っ！ 動じてなんて……やるもんか……！）

震える唇をぎゅつと噛んで、瞼も再びきつく閉じた。拳を握る。汗ばんだ手中の熱に浮かされまいと、まだ自由を許されている右足の指を折り曲げたり戻したり。詮無い動きに興じさせて、意識を逸らすことに腐心した。

「久しぶりだから、味わせてもらおうよお」

ベッドから降りた敷沼が前に回ってきて膝をつき、大きく開けた口を乳房へと寄せてくる。恐怖を押し殺す間もなかった。右の乳首に密着した大口が窄まり、チュツと吸いつく。間髪容れずに口中の舌が躍り、レルレルと乳首を舐め転がし始める。

唾液たっぶりの舌にくるまれた右乳首が、男のもたらす熱と粘ついた感触に疎むと同時に、悶えてしまう。乳肌の微細な震えに付かず離れず寄り添って舐りつく舌遣い

の繊細さに、乳頭はしこりを強め、乳輪がぷつくりと浮き立ち始めていた。

（全部、生理反応。身体は……もう好きにすればいい。でも、心まで同じにできると思わないで！）

抗う女の不意を衝き、男の舌が右乳首を離れて、左の乳房に舐りつく。右同様ゆつくり円を描く舌遣いが、乳の丘を攻め上がってくる。

「はウツ」

堪らず、また小さく短い喘ぎが吐き漏れた。左右両方の乳房に植えつけられた、歯痒くも切ない疼きが苛立ちを助長する。

じかに触れる舌と口唇で、女の焦れに確実に気づいているはずの藪沼が、決して攻め急いでこない。その不気味さが、耐える時間をより長く感じさせる。

食みついた藪沼の唇のもたらす柔い圧により、わずかにたわんだ左乳房が甘苦しさに戦慄いた。

「ふ……っ、うう、っ。はあ、あ……っ！」

噛み殺せなかった喘ぎを重ねるごとに、含まれる甘い響きの割合が増してゆく。ざらついた舌腹に舐られては震え、甘噛みされては悶える乳頭の隆起ぶりは、もうごまかせない。

「ひ……っ、ああ、あっ、あ……っ！」

ショーツ越しに秘裂を擦る手つきの巧みに、女心がますます熱を孕んでいるのを

自覚せずにはいられない。湿った薄布一枚隔てて藪沼の指にも伝わっていると嫌でも確信させられる、熱量と潤みぶり。染み出た蜜がクチクチ鳴るのに合わせて喘ぐ口唇を、閉じる余力すら、もうない。

（駄目、このままじゃ……駄目っ！）

咄嗟に自身の右手小指を噛み含む。いつしか半開きとなっていた瞳は、閉じることなく虚空を見据えた。

「ベッドに寝て。少し、腰を浮かせてくれるかな？」

男が猫撫で声で告げてくる。

一瞬身が強張ったが、「藪沼の指示には逆らわない」——事前に交わした契約内容进行い出し、緊張を殺せぬままベッドに仰向けとなった。恥を忍び、震える脚に力を込めてやっと腰を浮かせる。

（これは単なる契約。契約を履行してるだけ……！）

ただそれだけのことなんだと言ひ聞かせる女の心中などお構いなしに、ごつい手がショーツを下ろしてゆく。

（は、あ……ああ……。見られちゃう……っ）

蜜ごと押しこめられていた股肉が、外気に触れてぶるりと震えた。その拍子にこぼれた蜜汁が内股を伝う。己の肉体の浅ましさを改めて思い知り、その象徴たる部位を注視される恐怖におののく。同時に、耳の先までが羞恥の色に染まった。

ショーツが足首から引き抜かれ、生まれたままの姿にされてしまったことで、羞恥と怯えはいよいよ混然一体となって身の内で猛りだす。恥辱に耐えかねた両脚が自然と閉じる。それでもまだわずかに覗いている股根を、女の細指と手のひらが覆った。

「別に浅岡ちゃんをいじめたいわけじゃないんだ」

（脅迫しておいて、今もこんなことしながらっ……ふざけないでっ！）

煮沸する怒りに囚われることで、一時でも羞恥を忘れられれば。そんな思いから、藪沼の言葉に耳を傾けてしまった。

「浅岡ちゃんの気持ちたちが柔らかくなるまで、じつくりとマ○コ舐ったげるからさ。足開いて。手、どけてよ」

命令を拒めば今までの苦労が水泡に帰し、藪沼の影に怯えずに済む日々もやってこない。

（卑怯者……！ 卑劣漢。色情魔。最悪……！）

内心でいくら罵ろうとも、状況は覆らない。

悩む間にも、股の間にしゃがんで準備万端整えた男の、熱い鼻息が吹きかかる。

「ひ……っ、あ！」

鼻息を浴びた右手の甲と、その向こうに隠れた股肉が怯えたように身悶えた。

下着を着けている時点で「濡れている」と指摘されていた股間が、力むことで内に溜まる蜜をひりこぼさんとする。堪えようと腹に力を込めれば、身の内に蓄積する焦

れを強く意識させざるを得ない。

そんな状況下にあつても、心は折れなかった。

一時の羞恥と、家族との日々。

（そんなの……）

天秤にかけるまでもない。躊躇いを押し切つて、股間から右手を外した。おずおずと両足を開き、濡れた秘唇を藪沼の前に曝した。

「ありがとう」

にんまり緩んだえびす顔がひと際イヤらしく映る。

緊迫した息遣いに合わせて上下する恥丘。淡く生え茂つた恥毛を行き過ぎて、とうとう、男の熱視線が濡れそぼつ蜜源へと注がれる瞬間が訪れた。

「やっぱり濡れてるね」

勝ち誇つて告げながら、さつそく指で触れてくる。

「……っ！」

恥ずかしがるのを期待されているように思えて、必死に声を殺す。それはせめても矜持きんじでもあつた。

淡い恥毛の草むらを掻き分けられ、恥丘を押さえられる。女体の腰から背にかけてが跳ねたのを見計らつて、男の顔が迫り来る。その間に膣口を指で広げられ、薄桃色の内粘膜までもが露わにされた。

(智……！)

吹き荒れる恥辱を、夫の笑顔を思い浮かべること耐えしのぐ。

「ンッ……!!」

腹積もりを固めた一瞬後に、ぬるりとした感触が這う。それも、危惧した割れ目ではなく、その上端で息づく陰核へ。舌先からの繊細な刺激が注いだ。

(こ、こんなのくすぐったいだけっ。あ、あぁっ、あア……し、しつこいっ)

くすぐるようにつつかれた突起が、その都度もどかしさに喘ぐ。もどかしさが消える前に再訪するくすぐりに、一層の煩悶を刻まれる。

頑なに口を閉じる女との根競べを楽しむかのように、男の舌が丁寧な動きを繰り返す。貪られるよりもずっと辛い状況に心が抗うほど、腰の震えが止まらなくなる。

「膨らんできてるよ」

自分の身体だ、指摘されるまでもなくわかっていた。藪沼の唾を塗りたくられたクリトリスは隆起し、早くも被っていた包皮から頭を出している。

「じつくりされるの、好きなんだね」

「ふ、っ、んウウッ」

反論するよりも先に、鼻にかかった声が漏れる。それこそが答えと捉えた男の舌が、新たな動きに転じた。

すっかり勃起した陰核を、男の厚ぼったい唇が吸い含む。いたわるように慎重な吸

引と、唇の優しい圧迫に続いて、再び口中の舌が舐りついてくる。

「んんんっ」

あやすような舌遣いに煩悶させられる。腹立たしく思いながら唇を噛んでいると、また藪沼の舌はチロチロとくすぐる動きに転じた。

チュッ、チュッと浅く吸われた陰核が、分厚い唇に軽く食まれる。

「ん？ これ？」

円周をぐるりと舐られたばかりの陰核の先端を、舌の腹でそつと捏ねられた直後。藪沼が得意げに問うてくる。

（違うっ！）

声を出す代わりに、首を横に背ける。火照る肌をじかに触られている以上、藪沼にはバレバレだ。それでも、羞恥に震える表情を覗かれたくはなかった。

「そっか、こうかあ」

確信得た男の舌が先の動きを繰り返す。同じ動きの中でも緩急を交えることで、身構えを許さない。改めて藪沼の巧みさを思い知った。

腰のあたりから、力が抜けてゆく。代わりに、ジンと膿んだような疼きが、火照りに伴われて股から全身に波及していった。

（駄目、これ……っ、こんなの、知らない……！）

気丈に努めていた心が、今初めて弱気に吞まれかけた。

陰核の先端を捏ねながら吸われるたびに「駄目」と言い募る心の声が険しくなり、心拍も早鐘のごとく鳴る。

「この前は強引なのばっかだったけどさあ」

合間に喋る藪沼の手が、知らぬ間に女体の股座に這っていた。左手は陰核の根元を撫であやし、右手は膣内へ。陰核を舐られる煩悶の中で、膣内に指が入るのを感じた。

「んふっうんんんっ」

これまでで一番の音量が、押し出されたように、閉じた口端から漏れ響く。

「こういう優しいのに、実は弱い？」

突き入れられた指は、左手の人差し指一本。それで膣の浅い部分を、やはり緩慢に掻き回された。

「指そんなに動かしてないのに」

乳肌や陰核と同質の菌痒さを与えられた膣肉が、蠢動^{しゅんどう}しては、先から溜まり通しの

蜜ごと男の指に吸いついていた。

「いいよ、軽くイってごらん」

デリカシーの欠片もない男が、女体の状況を的確に判断して許可を与えた。

（藪沼の……くせにっ……!!）

見透かされたことへの羞恥も、脅迫者相手に上から物を言われる悔しさも、我慢の邪魔をする。

「いいよ、ほら、よしよし」

いよいよ子供をあやすような物言いとなった藪沼の唇が、間に挟んだ陰核を摺り捏ねる。膣の浅い位置に留まる指先が、内壁の蠢動に合わせるようにやんわりと蠢く。掻き出すように動いた男の指に引きずられるように、蓄積され続けた菌痒い肉悦が一拳に噴出するのを、抑えられなかった。

「んっ！ ふんうっ、んんんんん……！」

終始声を堪えたままでの、絶頂。決して大きくはない、けれど波状に襲い来る快楽の波に合わせ、腰が痙攣する。そのたび、芯から悦楽の痺れが湧いて、全身に波及していった。

（悔、しいっ……）

女の身体のままならなさを呪うさなかにも、藪沼の攻めは、やまなかつた。

「もつとちゃんとイッてこうね」

股下でそう囁くや、未だ余韻にヒクつき通しの陰核を、浅く食む。

「ひうっ！」

思わず漏れた声の甲高さを恥じながら、執拗な藪沼への憎しみを新たにした。

（ああ……そう、だった、こいつは……）

女体を労わる優しさなど一ミリも持ち合わせず、快楽を貪ることに執心する。藪沼

幹夫は、そういう男だ。

（あの夜も、こうやってネチネチと、何時間も……）

温泉旅行の夜に嫌というほど骨身に染みた肉悦の記憶がまざまざと、最悪のタイミングで甦る。それもあつて火照りを増した膣内で、藪沼の左手人差し指が、「おいでおいで」をするように動いてみせた。

「ふっ……うう、っ、んんうっ」

まだ余韻の残る膣壁を内側からやんわり捏ね扱かれ、甘痒い感覚が生じる。それでもまだどうにか声を堪えられた。

陰部を溶かすような丁寧さで膣壁をつつかれ、まだ鎮まっていなかった肉悦の波が腰の芯から迫り出してくるのを知覚した。

「いいよ、そうそう、もう一回だ」

何がそうなのだ。よっぱど吠えたいのを我慢して、一度目同様じわじわと迫り来る波に備えた。

ヂュツと吸われた陰核がいよいよ疼きを強め、痺れてくる。しばらく触れられていない両乳房の内にも淫靡な熱が溜まっていて、脳天まで熱に浮かされたようにぼうつとしている。

脚の付け根にまで再び痙攣が広がっていくさなか。とろ火で炙られ続けているかのような錯覚に苛立つと同時に、予兆を感じた。

（ああ、また……くるっ……！）

身構えるのを邪魔すべく、藪沼の右手が膺の割れ目に添い、上下に動く。あくまで優しく、刷毛^{はけ}で掃くようなソフトタッチ。それが、繰り返し往来した。

「あああああつ！」

駄目押しを受けて訪れた波は、一度目よりも確実に大きい。腰の痙攣が治まらず、勝手に開いた膺口から蜜汁がだらだらと滴った。

（う、嘘……ど、どうしてっ!?)

「今度は中也……ねっ」

怯える女の心根をあやさんとする猫撫で声が、癩で堪らない。その苛立ちすら吞まんと、藪沼の左手人差し指が、膺の入り口付近の上壁を引っ掻いた。

「ひあ！」

今まで通りに軽く穿られたはずが、声を殺せない。

蕩けた声音を聞き留めて、藪沼が目尻を垂れ下げ、一層スケベな顔つきとなる。温泉旅行の夜、食った女体にとどめの一撃を見舞わんとした際も、同じ顔だった——。

「だっ……やっ、だっ、めっ……駄目えっ！」

最悪の思い出が、言うまいと誓っていた制止の懇願をひり落とさせる。

今しがた攻められた膺の上壁は、温泉旅行の夜に藪沼に教えられた弱点の一つでもある。加えて、より切迫した事情が焦りと弱気を助長した。

（ああ……で、出ちゃううう……っ!）

男の指の動きに合わせて、膣の奥から快樂の波とは違うものが噴き出さんとしているのだ。

「大丈夫、ここ刺激するとみんな出ちゃうんだから」

察した藪沼が、猫撫で声で囁く。それにより生じた怖氣がそのまま身の痙攣に合流して、ひと際の煩悶を育んだ。

「いやっ……」

いよいよ最高潮に達した切迫感から逃れるすべもなく、天を仰ぐ。咄嗟に唇を噛んだのが良くなかったのか、意に反して収縮した膣口から少量の飛沫が散った。

「いいよ、そのまま全部出しちゃえ！」

吠えた藪沼の口唇が、陰核を離れて膣口へとへばりつく。

プチューッという卑しい音色が聞こえるのと同時に、その瞬間は、あえなく訪れた。「あッッ！ ひつ、あアッ、あアアアッッ！」

堪える間もなく一気に女体の内を走り抜けた喜びの大波が、膣の口から大量の蜜と共に噴出した。

「んぐっ、んっ、ずっずずずずずっ」

引き金を果たした後も吸引をやめぬ藪沼の口の中に、蜜汁が啜り取られてゆく。

「ひっ！ やああっ、飲まな、ひっ、ああああっ……！」

引き攣った制止の言葉は当然聞き入れてはもらえず、啜られる際の振動にすら悦を

与えられ、泣き咽んだ膺の口がぱっくり開いた末に蜜を吐く。

放尿にも似た解放感と、それを吸飲される恥辱、伴う振動刺激。すべてが一緒くたになった結果、巨大な快感の弾丸となって襲来する。

その、一度目とも二度目とも違う、熾烈なオルガスムスに意識が白む。

「あつ、ああ、ひっ！ あ、やああつ、も、もおおっ」

やがて腰から下の感覚が薄れ、痙攣する様が他人事のように思えてくる。なのに波状に襲い来る快感だけは勢いを増し続け、鮮烈に女体の内を駆け巡っていく。

もう駄目、これ以上は無理だと、喉元まで情けのない弱音が迫り出してくる。それでも。

（挫けるわけにはいかないの。私は、智の奥さんなんだから……。今日で全部清算して、智と智美のところへ帰るんだから……！）

悔し泣きの臉裏に浮かんだ夫と娘の笑顔に励まされ、再び口唇をへの字に結んだ。

「浅岡ちゃんも、そろそろ欲しいでしょ、コレ」

ガウンを脱いで全裸となった藪沼が、自信満々に尋ねてくる。

中年太りの腹の下で堂々屹立する男性器が、嫌でも目につく。先端を先走りのツユで濡れ光らせ、使いこまれた赤黒い砲身には幾つもの青筋を浮かべている。

——卑しい藪沼の性根を体現したみたいなの、おぞましさ。

咲美の脳裏に浮かんだ感想とは裏腹に、肉悦の塊が居座ったままの下腹部が疼きを強めてしまう。ベッドに座り直したばかりの腰が自然ともじついてシーツを巻きこむ。「今一番気持ちいい状態になってるよ。浅岡ちゃんのソコ」

再び眼前へと迫ってきた藪沼の指摘を受けて、改めて彼の舐りつくような視線を意識させられる。ハッとなって足を閉じた時には、すでに屹立したペニスが鼻先にまで迫っていた。

「欲しかったら、脚を開いて、『来て』って言って」

あえて命令せずに意思決定を委ねたのは、それだけ自信があるということか。

「せっかくだし、心の底から気持ちのいいセックスを楽しもうよ。あの日みたいに」にわかに、温泉旅館での夜の記憶が身と心に再来した。屈辱を噛み締めながら恍惚に啼かされたことを思い出し、心が膿んだ痛みに苦しめられる。反して、女体の内に蓄積する疼きと火照りは強まっていった。

すでに今日も散々弄ばれ昂りきった状態に置かれている女体が、今すぐ内に溜まったすべてを発散したいと喘いでいる。それは、否定しようのない現実。

ふらふらと視線を上げると、藪沼と目が合った。

「僕と、愛し合おう？」

肉棒に自ずからコンドームを被せながら、ぬけぬけと言いつ放つ藪沼。そのふてぶてしさが、女の自尊心を傷つけ、怒りを呼んだ。

「楽しくもないし、あなたと愛し合うつもりもないです!」

何より、夫への想いの強さを軽んじられたことに腹が立つ。

(私が愛してるのは智だけ。他の男の人となんてありえない。まして、この世で一番嫌いな、あなたなんか……!) 馬鹿にするのも大概にして!)

止め処もなく噴出した憎悪は見る間に表情となり、それを見た男が深い溜息をつく。
「……さすが。いや、それでこそ浅岡ちゃんだ。まあ、だからこそ惚れたんだけどね」
脂顔を照からせて告げるなり、表情も変えず、おもむろに迫り来る。

「やつ! 嫌あつ……ンッ!」

掴まれた脚が、左右に広げさせられた。危機に強張る女体に身構える隙を与えることなく、ゴムを装着した逸物が、膣口に押し当てられる。

(嫌!)

身を弄ばれる覚悟はできていたものの、藪沼に対する嫌悪と憎しみ、蔑みが最高潮というタイミングでの襲来だったのが最悪だった。

「待って! 嫌だっ!!」

強い拒絶感情が怒声と共に溢れ出し、ベッドから腰を浮かさんとする。

「大丈夫、ちゃんとゴムしたから!」

逃げる女体にのしかかる格好で、男の逸物の切っ先が膣の口——閉じようと足掻きながらもたつぷり詰まった蜜が邪魔してままならずにいる、その扉をこじ開ける。

「あうっ！」

一気にへその下まで突き抜けるような圧迫感に、堪らず呻きが噴き漏れる。全身に巡る卑しくも甘美な痺れに女体が引き攣る間に、男の肉竿が根元まで姦通した。

（大、きい……！）

真っ先に、そう思わされる。

そんな規格外の代物を根元まで挿れたまま、がっしりと抱き締められた。おかげで、圧迫感は、息苦しさを覚えるほどとなる。

ベッドの上で重なった男女の頬と頬が触れる。

「うぐっ」

上にのしかかる男の重みが息苦しさを助長する中、膣内の最深部を亀頭にグリッと押された。

「痛いっ！」

「痛い？ そんなことないっしょ？」

藪沼の言う通りだった。だが、そうでも言わなければ怖かったのだ。

実際は、恍惚の痺れが腰から奔りだし、脳天にまで突き抜けている。

女体の状態を的確に見定めた上で、男は膣奥への捏ね繰りを続行した。まるで子宮に刻印を押すかのように、亀頭の丸みを十二分に活用して摩擦刺激が施される。

「ひっ、ン……あひっ、んぐっ、ンンンうううッ」

声を殺そうと躍起になつても、次々に湧き出る喘ぎが許さなかつた。子宮から奔る快樂電流が膣肉を痺れさせ、甘美の内に蜜を生成させる。蜜の溢れた状態で蠕動する膣洞全体が、藪沼の腰使いの手助けをしてしまう。

「ぜったい虜にしてみせるよ！」

熱い吐息と共に悪魔が宣言する。頬が触れ合つたままなために、ダミ声^{だみこゑ}が女の脳髓をも震わせた。髭のチクチクが頬を刺したが、それを厭う余力はもうない。

衝撃に耐えるべくシーツを握り締めた両手のひらに、熱と汗が染む。

（これが智とだつたなら……）

愛しさに喘ぐ心と、快感に悶える身の求めが合致することで、思う存分しがみつけたものを――。しても仕方のない想像にすがりたくなるほどに、現状への苛立ちと煩悶が積もつていた。

己が形状を刻みつけんと執拗に押し当てられ、擦りつく亀頭に蹂躪される他ない女性の儂さを、恨めしくすら思う。

子宮の発する痺れは、早くも膣内全体に波及していた。切々とした疼きを孕んだ膣洞が収縮を早めたがるのを、どうにか意志の力で抑えこんではいる。が、それもいつまで持つか。膣洞の中心で小さな円を描く動きに終始している藪沼の肉棒が煩悶を植えつけてくるたびに、不安を煽られる。

いっそ、快樂に身を任せてしまった方がとも思うが、それを頑なに拒む藪沼への嫌

悪と憎しみは未だ最高潮に達したままだ。

（智……お願い、また、力を貸して……!）

理性と肉体のせめぎ合いの只中で、また胸内の夫に救いを求めた。

まるでそれを見計らっていたかのように、敷沼の腰が今日初めて深く突きこまれ、パンツと小気味よい肉同士のぶつかる音が鳴り響く。

「んひいッ!」

限界まで追い詰められているだけに、ただ一突きが膣洞に甘露と響き渡る。無理やり抑えていた収縮がここぞとばかりに発生し、締めつけられたペニスが喜々と弾んだ。その弾みにまたあてられて、膣の贅肉が喘ぎ、蜜を吐く。

再びグリグリと子宮の鼻頭を擦られると、切ない甘痒さと狂おしさがこみ上げる。

「ひッ! あひ、っ、いいいっ」

次いで、肉幹で肉壁を押し広げるように揺すられ、恍惚の痺れが喉をついて出た。

膣と口唇が続けざまに、主の意思に反して抵抗を諦めた。その現実を知らしめようと、また男が深い突きこみをして、子宮の口を扶る。

（絶対に声を堪えてやるっ……!）

気丈に引き絞った口唇からは喘ぎは漏れなかったが、その分、強張る下腹部には熾烈な衝撃が響き渡った。そこから広がる火照りと疼きに、瞬く間に全身が毒される。

目が霞む。知らぬ間にだらしなく開いていた口唇から、よだれがひと筋垂れ落ちる。

口呼吸を忙しくするほどの苦しきのさなかにあつて、頭に血が上った。ぺちやくちやと饒舌だった男が、黙って凝視してくる。

（嫌……！）

顔を背ける。すると、それを待っていたように藪沼が動いた。

両足を担ぎ上げられ、強制的に浮いた牝腰が汗を飛ばした。藪沼の肩の上に脚を乗せる格好となり、尻が天井を向いた分、さらに肉茎が深く強く子宮口に突き刺さる。

「ンッィィッ！」

ドスツと重たい衝撃を味わった、そう思った瞬間にはもう呻きめいた喘ぎを発していた。亀頭に突かれた場所の奥から迫り出てきた快感の塊が、なお押し突く亀頭の圧により弾けた——そんな感覚。瞬時に視界が白み、跳ね震えた腰の中心部から、蜜の飛沫が飛散する。

（なっ、何なのっ、これっ！）

初めて味わう感覚に恐怖する女を諭すように、男が言った。

「ポルチオっていうんだよ」

聞いたことのない言葉に戸惑う間もなく、男の腰がまた、子宮口の一部分をグリグリと擦る。愛液がまぶされて滑りやすい状態なのをもとめせず、ピンポイントに、執拗で丁寧な摩擦圧を施してくる。

「ひッ！　ンッ！　ンンッ！」

ひと刺激浴びるごとに、子宮全体に快楽の波が押し寄せた。

「ここ、旦那にしてもらったことないでしょ？」

得意げに語る藪沼に言い返すことができなかった。嘘をついて夫をかばっても、見透かされるだけ。汗だくで見つめてくるえびす顔の底知れなさが、そう思わせる。

（焦らされて焦らされて、その上でなんだから……仕方がない。そう……よ……）
嫌悪と憎しみを、快楽が上回った瞬間だった。

「やつ、あひつ、も、もうやめてえっ」

それでも口は、拒絶の意思を言葉にする。

まだ一時間余しか経ってない段階で、これほどの、未知の快楽を刻みこまれてしまふなんて——残り時間の長さが、今さらながらに恐ろしい。

その恐怖を上回る勢いで波及していく肉の昂りに吞まれて、女体が引き攣る。いつしかピンと張っていた細足の裏が天を向く。

（嫌、来ないで。もうやめて……知りたくないの、こんなの……!）

願う心を裏切って、震え通しの身体が熱を振り撒く。胸元で弾む乳房の丘陵を、大量の汗が滴り落ちてゆく。双臀が、痙攣する腰に乗じて、抱きつく男の手の内でぶる跳ねた。

「いいいいいよ、一回イっていいからね」

男の許しを待っていたかのように、最大の波が押し寄せる。心の制止を振り切って、

目一杯に収縮した膣が肉棒を締め上げた。

「いつ、やつあああ……イッ、く、のついやあああッ！」

温泉旅行の夜に躡けられた「イク」という言葉が勝手に噴き漏れる。敗北の法悦を迎えて悔し涙に暮れる眼に、藪沼の分厚い唇が迫り来るのが映った。

駄目、それだけは駄目だ。

大嫌いな男から与えられる、魂まで蕩かすようなアクメに狂いながら、必死に顔を逸らす。まだ抗えることが呪わしく思えてしまうのは、一時の気の迷いに過ぎない。

「……ん、ま、いいや。じゃ、また違う体位でやろっか」

きつと身体の昂りが治まりさえすればと、切に願った女を見据えたまま。藪沼は冷酷に、休みなしでのセックス続行を通達した。

室内にパンパンパンと腰を打ちつける音と、女の淫らな息遣いだけがこだまする。
「はあッ、ああッ、ああッ、はあッ」

新たな体位でのセックスは、最初からトップスピードで始まった。

今はソファに座る藪沼の上に跨らせられ、激しく突き上げられている。藪沼に背を預ける形で、真下からの突き上げを食らうたび、腰の芯で切ない衝動が弾けた。

女体が縦に跳ねるたび胸元で弾む二つの膨らみにも、男の手がそれぞれ覆い被さって摩擦と圧をかけてくる。たわんだ乳肌にじつとりと染む熱気と、指の腹ですり潰さ



れた乳首に奔る快樂電流。二つが一体となつて女体の内を巡り、さらに、ペニスを食む膺の甘苦しさとも合流した。

「ふっ、ううっ、ン……ッは、ああっ、やあああっ」

下腹部にまた予兆を感じる。

「またイキたいんだね」

告げて、藪沼が乳首をコリコリと抓り、腰を大きく捻った。それだけで小さな悦波が再来し、腰の痙攣がまた止まらなくなる。

「ンン！ ふうッあっあああっ！」

ポルチオ。藪沼がそう呼んだ部位で絶頂を味わわされてから、身体の感度が高止まりしているのだ。また一つ藪沼に仕込まれた、そのことを嘆きつつも、イキ連ねるたび、抗えずに牝腰がぐねり弾む。

心が肉体にブレーキをかけられる段階を大きく超えてしまっている。そう思わなければ、すでに無数の傷にまみれてひび割れている自尊心が瓦解しかねなかった。

「もう一度思いつきイキたいでしょ？」

思うさま肉悦を貪り上機嫌の藪沼。その荒い鼻息がうなじに吹きかかる。うなじに奔るむずつきに苛立つ以上に、腰使いを緩めた男への憎悪が煮沸した。

（どこまでも人を愚弄して……どれだけ玩具にすれば気が済むのよ！）

柳眉^{りゅうび}を逆立てて仰いだ壁時計の示す時刻は、午前十一時半を回ったばかり。

(嘘……まだ、一時間半しか……経っていないっていうの……)

藪沼とあと六時間半も床を共にする——その果てに我が身がどうなってしまうのか。恐れおののいて、なのに亀頭に捏ねられた膣肉が喜々と締まる。

小突き上げられた牝腰が弾み、その中心で弾けた小さな悦波が甘苦しい痺れとなつて縦横無尽に駆け巡り。パクつきを抑えられなくなった膣口からは、男が腰を引くたびに掻き出された蜜汁が滴り落ちていた。

「実は今日、二時間しか時間が取れないんだよね。年末だし、店の方、やっぱ休み取るの無理でさあ」

突如、男が前提を覆す言葉をぶちまけた。

それでは、十二時でこの狂宴は終わりか。あと三十分で解放されるのか？

恐れおののいたばかりなだけに、甘い期待が、疼く乳首の奥で湧き上がった。

無論、期待に添う言葉を藪沼がくれるはずもない。

「だからさ、四分割してもらいたいだ」

男は信じられない提案を持ちかけた。

「そんな話っ！ い……ひあんっ！」

嫌だ、到底応じられない。そう放つはずの口唇が、肉棒の強烈な突き上げを食らった股根より奔ってきた切なさに呑みこまれる。

「今日が初日で、あとの三日は浅岡ちゃんの都合を聞いて合わせるからさ。二時間ず

つ四回で、合計八時間。同じことでしょ？」

「そんなわけない……っ！」

夫を裏切ることになると苦悩しながら、やっと今日という日を迎えた女の覚悟をあまりにも軽んじる物言いに、怒声を抑えられなかった。

「八時間一緒に過ごす約束でしょ。その内、今日は二時間しか消費できないんだから、しょうがないじゃん。嫌なら、契約は御破算ってことになるけど、いい？」

淡々と言いつちながら、腰で円を描き、膣洞を穿り回す。

「んうっ……！ ふっ、あ、あぁっ」

無茶苦茶な言い分に反論すべく開いた口唇が、また再来した小ぶりの悦波に溺れて嬌声を漏らす。男の毛むくじやらの湿った手のひらによつて改めて開脚を強いられた両腿が、嫌悪を覚えながらも喜悅の痺れに引き攣れた。

「せっかく念書まで書いて、桂子にも証人になつてもらつたんだ。もうここはきつちり約束果たして気持ちよく終わりにしようよ。ね？」

意地悪く、エクスタシーの手前で炙り続けつつ決断を迫るやり口に、反吐が出る。絶対にこんな卑怯者に屈したくはないと、心が煮え立つ。

しかし、今日の苦闘を水泡に帰させぬためにも、選べる道は一つだけ。

「っ、く、うう……」

結局、菌嚙みしつつ首肯する他なかった。

「いやあ、ありがとうっ浅岡ちゃん！」

喜々と吠えた男の腰が、お礼とばかりにまた尻肉を打ち据える一撃を放った。

「あひイッ！」

パンッと盛大な音一つだったのが、じきに小気味のよい連続音へと変わり、とうとうトップスピードに戻った腰使いに、牝腰は突き上げられっぱなしとなった。

「あつ、あつ、ああつ、やつ、あつ、あつ、ああつ、あ……！」

濡れた股肉が、振り落とされまいとするように収縮を強め、結合部からはボトボトと大量の蜜汁がひり落ちる。閉じた脛裏は明滅して、意識も白んだり覚醒したりを繰り返す。もはや明瞭な言葉を発せすらない。

一時間余も限界ギリギリで燻り続けた官能の火種が、男が思う存分に放つ衝撃を受け止めるたび、急速膨張してゆく。爆発は、間近に迫っていた。

「最後は一緒にイこうっ」

荒く乱れた呼吸を吹きつけながら、藪沼が囁く。

直後に両太腿を掴まれ、ふわりと身体が宙に浮く感覚に女体が震えた。それから一秒遅れで、男の肉茎が膣内に深々沈みこむ。その力強い掘削ぶりと、逞しい膨張ぶりを、引き攣れながら締まった膣肉が存分に味わう。

「イッ、ひゃ、あああッ……ぐうウウウウッ!!」

まるで獣のような咆哮を上げて達した、絶頂。それはまぎれもなく、温泉旅行の夜

に味わたつたのと同種のものだつた。理性もろとも吹き飛ばすような熾烈さが長く尾を引いて、女体の隅々まで性感帯と化したような錯覚に囚われる。

「くうっ、うー……っ、はは、浅岡ちゃん、そんなにきつくしがみつかれちゃ、息苦しいよお」

コンドーム越しに膣内で果てた藪沼の逸物が忙せわしない鼓動を連ねているのを、隙間なく吸いつき離れぬ膣肉で知覚した。それでさらに二度三度、悦の大波に攫われる。

「やっあ！ ああああ……！」

男の腰に交差してしがみついた両脚が痙攣から解き放たれるまでに、さらに二度、波に攫われて意識を飛ばした。

意識が途切れる直前、目が向いた壁時計の示す時刻は——正午、二分前。

「じゃ、桂子にメールで連絡入れとくから」

タバコを吹かす藪沼の余裕の声が、遠くに聞こえた。

5

ホテルを後にしてから、五時間後。身なりを正して娘を預けてあつた実家へ迎えに行き、夕食の支度が終わる頃に帰宅した夫を出迎える。いつも通りを装って家族と過ごすことは、疲弊した肉体と摩耗した精神にさらなる苦悶を強いた。

食後、娘を寝かしつけて、寝室で夫を待つ。一人の時間は、罪悪感と向き合うことを余儀なくする。苦悩するうちに智の気配がして、身が強張ってしまう。

帰宅後に改めて念入りに身を清めてもいたし、態度もおかしいところを見せないように細心の注意を払い続けている。

（大丈夫。いつもの通りに、できてる……でき、て……っ）

入室してきた夫と目が合って、心臓が跳ねた。その一瞬後には、彼に抱き締められていた。

「えっ、も、もうっ、どうしたの急に」

正面に迫った彼の目を見ないわけにもいかず、心拍がどんどん速くなる。彼の顔がさらに近づいて、何をしようとしているのか理解した瞬間。

「風邪うつるよ」

咄嗟に言葉が出た。朝方ついた風邪気味という嘘を利用して、夫からの口づけを回避する。申し訳なさに、胸が押し潰されそうだった。

「もう良くなっただって言ってたじゃん」

顔を曇らせて、智が言う。

唇が重なる寸前に彼の唇に触れ、そっと押し留める役割を果たした右手の人差し指に、乾いた感触が残ってもあった。

罪悪感と恋しさが同時に臨界点に達し、堪らず智に抱きつくこうとした、その矢先

に脳裏に藪沼のニタニタ顔が浮かんた。

「もしもってことがあるし。お仕事忙しい時期に風邪なんかひいたら大変でしょ」
背に奔る悪寒を必死に押しこめて、何とか笑顔を拵える。それで手一杯だ。

（ごめん、智……）

引き下がった智を見て泣きたくなりながらも、今後への覚悟を固めた。

藪沼との情交は、あと三回も残っている。今からへこたれていては、あの醜男ふおとこに付け入られるのが目に見えていた。

（智がいてくれるから、頑張れる。絶対に乗り切れる、全部終わったら、その時は思う存分に甘えちゃうんだから。だから……お願い、待ってて……智）

愛しい人の頬を摘まみ、その温みに勇気をもらいながら、言い聞かせるように何度も念じた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

魔物姫
ファンタジー
アドベンチャー

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

二次元ぷち文庫

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍として読めるナチラノベル

姫騎士 クラサメイト！

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト
「アクトアインノベルズ」
から書籍化！

二次元ドリーム文庫

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 コドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索